

—学童保育訪問記— (新潟市)

子どもの姿から学ぶ指導員

Kひまわりクラブ(学童保育)は、A中学校わきにある独立舎でした。五坪の学習室と、一五坪の遊び場、三坪の事務室があります。子ども三五人(一年生七人、二年生五人、三年生一三人)指導員二人の構成で放課後の子どもの居場所づくりをしていました。

ここに転任して三年目になるH指導員から聞いた子ども中心のクラブづくりの苦労話の幾つかを紹介します。

▼子ども中心の生活づくりをつくるには学校・家庭生活の現在の状況をひきずってくる異なる年齢の群れ、それを集団化していく為にはまず二人の指導員が子どもへの共通認識をどう高めていくかにあります。M地区グループの研修会、福祉公社の月一回の研修会にも参加し、二人での討論学習等で、二年目ぐらいから子ども主人公の運営が緒につきます。父母の会

との密接な交流もかかせません。

▼子ども中心の親も参加した行事づくり、子どもが司会して「伝承遊び」をします。ゴム飛び、竹馬、おりぞめ、竹棒くぐり等々、すべてに子どもが参加し、プログラム案内状も子どもが作ります。親の援助を得て、子どもたちは失敗を繰り返しながら夢中になってつくり遊びます。こうした中で今までになかったやる気が育ってきます。「班長になりたい人」という三年生が九人も手を挙げてくるようになります。「学校に行きたくない」という不登校気味の子も手を挙げるのです。三年生が卒業式には自分で作った「飛び出し本」を別れの記念として手渡し、もらった子どもの「ありがとう」に大満足している子もいます。

▼暗い顔でいつも黙っている、嫌な事にじっと耐えている子(二年女子)がいま

した。友達にいじめられていたのです。しかし訴えてこない、親にも学校の担任にも話を相談しました。両者とも子どもの気持ちをよくわかってくれました。その後、その子どもは涙をながしながら嫌だった事を話してくれました。親も先生も指導員もみんなわたしの事をわかってきているんだという事がわかったのです。その子は次第に明るくなり、いじめた子どもと話し合うようになりました。

(木村 隆利・研究所員)

